高度経済成長期以降の日本人の意識変容は社会運動を衰退させてしまったのか？：

安定成長期において労働組合運動・社会運動はどのように認識されてきたのか

富永京子（立命館大学産業社会学部）

kyokotom@fc.ritsumei.ac.jp

1. はじめに——高度経済成長期以後の消費社会化と対抗性の喪失、社会運動の衰退？

- 経済の安定成長期（1973-1985）：消費社会化（各種チェーン、コンビニエンスストア、スーパーマーケット等の台頭）。「豊かな社会」の到来（岩田 1991）

- 社会の脱物質化・伝統的な価値観からの解放、物質的不満が解消された時代における、従来型と異なる政治参加の台頭。日本では署名、集会参加、政党機関紙購読が 1970-80 年代にかけて上昇し、非制度的政治参加の中でも「運動」より「依頼・請願」への意識が上昇した（蒲島・境家 2020）

- 対抗文化が衰退・商業化し、「記号化・差異化した消費」が台頭した時代でもあり（山田 2000, 2009; 上野 1987=1992 など）、生活＝消費という意識の強まりとともに、これまで消費の場に出現しなかった単身女性や若者といったアクターが合理的に生活を「消費」化する過程でもあった（満薗 2014）。

⇒ 「政治の季節」「激突の時代」（1968-1972）以降、「若者が消費社会の担い手となったために対抗性が失われ、人々が政治に背を向けた」とする議論はとりわけ社会学者による研究・評論において数多く見られてきた

⇒「人々が政治に背を向けた」という指摘は 1970-80 年代の若者に本当にあてはまるのか？さらに言えば「消費社会が人々から対抗性を奪った」という指摘は 1970-80 年代の日本を語る上で本当にあてはまるのか？

2. 先行研究——社会学における1970–80年代認識の「特殊性」

1970-80年代に生じた「社会運動衰退した説」をまとめると……

①人々の個人主義化・私生活中心主義が人々の公共性を衰退させた説

- 1970年代に顕著にみられる変容として、1970年代以降に価値観の次元で手段的価値（勤労・節約・効率性・計画性）から即時的価値（現在中心・情緒・余暇志向・私生活優先）への移行。若い世代になればなるほど情緒志向・現在中心志向へ。「社会奉仕型」人間の現象と「私生活」人間の増加（国民性調査）。「みんなで世の中を良くする」1970-80年代にかけて減少（NHK「日本人の意識」）。国の繁栄や公共への奉仕より個人の自由を重視する時代へ（佐々木 1985, 上野 1985, 綿貫ほか 1986, 安丸 1995）

- 1960年代から引き続き、住民運動から生じた革新自治体が継続して見られ、福祉政策も浮上するものの（1973年福祉元年）、1970年代後半になり下火に。かつて革新政党、平和・住民運動だった浮動票が「柔らかい自民党支持」になり保守回帰し、「経済成長」と「生活保守」を政府に期待するようになる。福祉や地域社会への企業（ないし労使協調型の組合）の進出。企業の持ち家補助によるマイホーム主義、企業中心社会による私生活中心主義の台頭（大嶽 1994, 上野 1985, 大門 2015, 田間 2015, 熊沢 1995）。

② 豊かな社会が人々の対抗性を衰退させた説（①に関連）

- 耐久消費財をめぐる格差は 1970 年代にほぼ解消。所有を通じた差異化と平等化の繰り返しによって、さらに新たな耐久消費財を手に入れるために所得を増やす……といった観念に支えられる人々の生活。「稼得」と「消費」中心の生活観念が都市と地方とを問わず浸透（金子 1985, 大門 2015）。大人のみならず子どもまで、消費を通じた「人並み」意識の形成がおこなわれた時代でもあった（岩田 1991）

- **世代という変数**の重視。1960年代における対抗文化の担い手が1980年代に企業社会に参入し、消費社

会を率先して主導する存在となったことにより、1970 年代にその「対抗性」を失い、保守化・脱政治化した（山田 2000; 小谷 1993; 小谷・土井・芳賀・浅野 2011）。「現代の文化変動の機動力として、世代闘争を無視することができなくなっている」（1971 年『社会学評論』青年問題特集）

③ 社会運動・労働組合運動への失望感が社会運動への参加を減少させた説

- 1975 年に国鉄をはじめとした大規模なスト権スト→失敗。労働運動が市民の共感を失う。専売、電電、国鉄民営化（大嶽 1994, 庄司・三宅 1985, 道場 2015 など）。

- 労働争議件数は 1970 年代がピークで、1980 年代でも 1960 年代よりは多い。労働者の組織化も 1980 年代＞1960 年代で、むしろ 1980 年代が最も組織化されている。一方労組の対抗性は薄くなり、労使協調型へ（庄司・三宅 1985, 渡辺 1988）

- 1972 年の連合赤軍「内ゲバ」により、若者が政治から遠ざかるとする議論も（伊藤 2015 など）

- 1970 年代から 1980 年代後半。至上命題としての共産主義への嫌悪感から生じた「正しさ」への懐疑と相対主義（北田 2005）。戦後民主主義的な「正しさ」への揶揄と消費社会の享受（山本 2020）

3. 分析枠組と分析対象

3-1. 世代間差異への着目

- 公共性・対抗性の衰退、個人主義化、消費社会の担い手化、私生活中心主義化といった社会意識の差異は、「団塊世代」（1944-1953 生）以前と「新人類世代」（1954 年-1968 生まれ）[1]以後で最も大きい（NHK 放送文化研究所編 2004）。下世代から上世代が従事している労働組合運動、社会運動、あるいはそこに内在する公共性・対抗性・集団主義はどのように映るのかを検討したい。

[1] 太郎丸（2016）の「日本人の調査」二次分析を援用

- 1975-1985 年を対象として、当時刊行された「若者雑誌」を検討する。当時の若者たちの生活に即した投稿を書く「読者投稿雑誌」を対象とする。生活に即した投稿といっても内容や形容はさまざま（批評的に日常を見るもの、「笑い話」にするもの、悩み相談の体裁を取るもの……）であるが、その「書かれ方」から当時の労働組合運動、社会運動に対する認識、また公共性・対抗性の衰退、個人主義化、消費社会の担い手化、私生活中心主義化といった社会意識の変容が明らかになるのではないか。

3-2. 対象としての雑誌『ビックリハウス』

- 1975-85 年に刊行された月刊誌。読者は男女半々で、読者の平均年齢は例年 18 歳（ビックリハウス・レポートより）。読者投稿が大半を占め、全国各地に読者・投稿者が存在する。

- 編集者として萩原朔美（映像作家、劇団天井桟敷、現・多摩美術大学名誉教授、1946 生）、榎本了壱（編集者）、高橋章子（編集者）、糸井重里（コピーライター）など。寄稿者として村上春樹（小説家）、日比野克明（現・東京芸術大学学長）、香山リカ、竹中直人など多数。編集者らは 1980 年代以降、美術系大学教員として教鞭を執るか、「若者の代弁者」としてテレビ番組、広告批評誌等で活躍するという経緯を辿った。

- 1970-80 年代「消費社会」との関連性。渋谷パルコ（西武グループ）を中心とした広告文化

- 一方で、創刊時の編集者たちにはオイルショック後の低成長期という時代認識の方が強かった。「若者は不景気で金がないって言うのにさ、それを誘う広告は華やかなんだよ。」（萩原朔美）

- 対抗性・政治的な性格の不在（外山 2017; 富永 2020）

- 編集者は、創刊時のスタッフがほぼ「団塊」世代に属する（かつ、全共闘運動かそれに近い運動経験を持っている）のに対し、1980 年以降はほぼ「新人類」世代に属する。読者はほとんどが 10-20 代（平均 18 歳前後）であり、「新人類」世代。

- 読者の男女比はほぼ半々。読者対象調査によると、平均年齢は 18 歳。

- 読者投稿が誌面の多くを占める「投稿雑誌」であった。「投稿」といっても、その内容は幅広く、批評・評論・随筆を書くコーナー「フルハウス」やお題となる単語を用いて物語を紡ぐコーナー「3 WORDS CONTE」、比較的短文で日々の体験や所感を綴る「ビックラゲーション」や「おもこ」、「ヘンタイよいこ新聞」など幅広い。しかし、基本的には「最近ビックリした出来事」(「ビックラゲーション」) や「身の回りのキモチワルイこと」(「ヘンタイよいこ新聞」) など、心情の吐露や身の上相談とは言い難い、物事の印象や感想を問う短文中心のコーナーと、物語を投稿する「エンピツ賞」や写真や絵画、自作の音楽、立体制作物を送る創作中心のコーナーで占められる。

- 第 1 号の発行部数は 5 万部、ピーク時の 1983 年で 20 万部、休刊となる 1985 年には 10 万部を刊行。

- 当時としては珍しい女性編集長（高橋章子)。高橋就任後の編集部も女性が多数を占め，1978 年には 5 名中 4 名，1979 年には 5 名中 5 名，1980 年には 5 名中 4 名，1981 年・1982 年には 6 人中 5〜4 人，1983 年には 4 名中 2 名が女性，1984 年には 5 名中 3 名，1985 年には 4 名中 2 名が女性であった。

4. 事例分析 :「新人類」から見た社会運動と労働組合運動

では、「新人類」である若者たちは、どのような形で年長者たちの社会運動を記述し、それを形容したのだろうか？

本報告ではとりわけ、若者たちが遭遇し、記述した社会運動として「デモ」を、労働組合運動として「ストライキ」(予備的に「組合」) を検索した。1975 年から 1983 年までのデータを検討したところ、「スト（ストライキ)」が合計 48 件（平均 5.33 件)、「デモ」が合計 25 件（平均 2.77 件）であり、抽出語として出現するものはかなり少ない。しかし、抽出語上位 100 位だけを集計した場合でも出現回数の中央値は年間抽出数 73 であるため、そもそも語のばらつきがかなり大きく、本雑誌上において若者たちはかなり雑多な内容について書いていると言える。

表 1　頻出語リスト

	1975	1976	1977	1978	1979	1980	1981	1982	1983
スト（ストライキ）	5	6	5	8	6	1	13	0	4
組合	1	1	11	4	5	2	5	1	0
デモ	3	4	2	5	6	0	1	2	2
総抽出語数	747,949	968,044	1,125,648	1,143,901	1,165,064	1,193,050	1,306,623	1,053,785	1,182,942

（1975 年 2 月号より 1983 年 12 月号までの『ビックリハウス』雑誌を全テキスト化し、KH Coder にて「スト or ストライキ」「デモ or デモンストレーション」「組合」で抽出。ただし、例えば「テスト」や「ストレートパーマ」など、文脈から関連しないと判断したものは除いている。

① 日常的に目にしたスト・労働組合運動に対する言及

第一に見られたのは、実際に日常生活の中で見たストなどの活動について記述するというタイプの投稿である。中でも、1975 年の国鉄のスト権ストのインパクトはやはり大きい。いずれも生活者・消費者の日常風景という印象であるが、労働者との関係性があるとその評価も少し異なってくるようだ。例えば、読者層が中学生～大学生であるために、学校のような場でストライキを見るタイプの言及が相対的に多くみられる。

また、労働者としての教員が持っている他の一面に対する「ビックリ」や「いじましく、カワイイ」さま

が記述されているが、ストライキや組合活動に限らず、生徒（読者）たちにとって「教員の教員らしくない姿」は格好の投稿材料にされていた。例えば教員が授業中の雑談として語る「戦時中の武勇伝」などもよく投稿・掲載されている（富永 2023a）。

② 過去の回想として現れる「スト」

「日常の風景」としてのストライキに言及する声は年々少なくなっていくものの（媒体側の性質が変容したこととの関連も強いと考えられる）、回顧録的や実体験の中で「ストライキ」「スト」「組合」が出現することも珍しくない。「する側」である場合もあれば「される側」である場合もある。

「デモ」の記述に関しては、編集者や寄稿者らが過去の学生運動体験を語ることが多いが（富永 2020）、ストに関しては体験談としてはデモほど言及されていない。この点については、一回の大イベントとして語られる学生運動とは異なり、そもそもストライキがそれなりに日常的な行為であり、敢えて語りの俎上に上がるほど特別なことではなかった、読者層である若者たちに訴求するような内容ではなかったといった点が考えられる。

③ 「ネタ」「洒落」「創作」の材料として使うもの

いわゆる「創作」や「面白い話」、言葉遊びの題材としてストを題材とする投稿が、特に 1978 年以降は増大した。例えば造語・略語を作る「全流振」のコーナーでは、以下のようにストライキを用いた言葉遊びの投稿が見られる。

上記の通り、他愛もないネタがかなり多いのだが、半分程度が国鉄・私鉄に関するストライキであることが興味深いといえば興味深い。読者の中心層である若者にとっては、他産業よりも鉄道のストライキの影響

が強く、ストライキ＝鉄道という印象がやはり大きいのだろうか（実際の産業別のストライキ数と比較まではしなくとも、当時の鉄道会社のストライキの盛り上がりというか、一般市民レベルでの認知などについてはお伺いしたいです）。

もう一点は、創作の題材として「スト」や「労働組合」を使うもの。社会運動や組合運動といったモチーフは、現実の語り（①②）に比して創作のモチーフとされる頻度がそれなりに高い点は興味深い。劇的である、対立構造が明示的で話を作りやすい、といったところなのか。

5. 考察と結論

1975-1985 年の若者たちにとって、ストライキ、労働組合の存在は日常的にはとくに公共空間において目にする行動として、また、より年長者である編集者や寄稿者がかつて従事した行動として、あるいは創作の中の出来事として認識されていた。

日常的に目にする労働組合運動は主に国鉄・私鉄のストライキ、あるいは教員の組合活動になる。ここで例えば「父親」をはじめとする家族の組合活動やストライキの話が投稿されても良さそうなものだが、その存在がない（さらに言えば、父親の仕事や会社の話題も必ずしも多くない）のが現時点では大変興味深い。この点は同時代の家庭の個人化を分析した岩田正美、木本喜美子の分析が参考になるが、高度経済成長期から安定成長期にかけてサラリーマンの長時間労働が定着し、父親が家庭内において「そもそもいない存在」として定着した点（木本 1995）、また冷凍食品や電子レンジなどの耐久消費財の普及で家族全員が揃う食卓が減少し、家族の生活時間にかなりのばらつきが生じた点（岩田 1991）などが考えられる。

頻繁に目にする機会があればその行動内容について理解はするもので、例えば「ストライキ」を用いた言葉遊びや創作などはそもそもストライキの意味を知らなければできないわけで、そういった意味での理解は若者にも十全に存在した。重要な点として、例えば学生運動やウーマンリブ、環境運動といった他の同時

代の社会運動と対比して、労働運動に対する冷笑的な声、攻撃的な声が極めて少ないことはかなり興味深い（富永 2020, 富永 2022a, 富永 2023b)。このように、1975-1985 年時点の若者において労働運動・社会運動に対する理解や寛容性に温度差があった点は、単純に「公共性・対抗性が衰退したから運動全般への無理解が進んだ」では解釈しきれない点であろう。

一方、この点は「個人主義化」や「消費生活の担い手化」「私生活中心主義化」といった当時主流とされる価値観と、労働組合運動の掲げてきた課題や目標の間に大きな齟齬がなかったからこそ冷笑・攻撃を免れられたという点も考えられる（渡辺 1988)。戦後民主主義的な「正しさ」(山本 2020）を女性運動や、環境運動、学生運動が代表していると認識され、忌避されてしまったのだろうか。

参考文献

北田暁大, 2005『嗤う日本の「ナショナリズム」』NHK 出版.

山田真茂留, 2000,「若者文化の析出と融解——文化志向の終焉と関係志向の高揚」宮島喬編『講座社会学七 文化』東京大学出版会.

————, 2009『<普通>という希望』青弓社.

小谷敏（編）1993『若者論を読む』世界思想社.

上野千鶴子，1987=1992『＜私＞探しゲーム: 欲望私民社会論』筑摩書房.

上野輝将，1985「ナショナリズムと新保守主義」歴史学研究会・日本史研究会編『講座 日本歴史　現代２』東京大学出版会.

蒲島郁夫・境家史郎，2020『政治参加論』東京大学出版会.

満薗勇，2014,「消費史研究というフロンティアの可能性 ： 日本近現代史の場合」『歴史と経済』57(1): 30-37.

山本昭宏，2020『戦後民主主義』中公新書.

大澤真幸，1998『戦後の思想空間』ちくま新書.

大嶽秀夫，1994『自由主義的改革の時代』中央公論社.

綿貫譲治ほか，1986『日本人の選挙行動』東京大学出版会.

竹内洋，2003『教養主義の没落』中央公論社.

庄司俊作・三宅明正，1985「現代社会運動の諸側面」歴史学研究会・日本史研究会編『講座日本歴史　現代２』東京大学出版会

道場親信，2015「戦後日本の社会運動」岩波講座『日本歴史』

大門正克，2015「高度経済成長と日本社会の変容」岩波講座『日本歴史』

田間泰子，2015「戦後史のなかの家族」岩波講座『日本歴史』

伊藤公雄，2015「メディア社会・消費社会とポピュラーカルチャー」岩波講座『日本歴史』岩波書店.

小谷敏・土井隆義・芳賀学・浅野智彦編 2011『若者の現在――政治』日本図書センター.

富永京子，2020「若者文化における政治への関心と冷笑――雑誌『ビックリハウス』を事例として」『年報社会学論集』33: 12-22.

富永京子，2022 「『書くこと』による読者共同体の生成メカニズム――若者雑誌『ビックリハウス』の投稿を事例として」『ソシオロジ』67(1): 99-115.

富永京子，2022b「「からかい」から見る女性運動と社会運動、若者文化の 70 年代――雑誌『ビックリハウス』におけるウーマン・リブ／フェミニズム言説を通じて」日高勝之編『1970 年代文化論』新曜社.

富永京子，2023a「1970-1980 年代若者文化における「戦争語り」の変遷: 雑誌『ビックリハウス』を事例として」2023 年度戦争社会学研究会研究例会資料.

富永京子，2023b,「1970-80 年代の雑誌を通じた「性の解放」と「個の解放」――『ビックリハウス』における女性の身体・キャリア言説を通じて」『社会学評論』294 号.

竹内洋・佐藤卓己・稲垣恭子，2014『日本の論壇雑誌:教養メディアの盛衰』創元社.

佐々木隆爾，1985「世界戦略としての新安保体制」歴史学研究会・日本史研究会編『講座日本歴史　現代２』東京大学出版会.

太郎丸博，2016『後期近代と価値意識の変容』東京大学出版会.

安丸良夫，1995,「現代の思想状況」『岩波講座 日本通史 21』岩波書店.

熊沢誠，1995,「企業社会と労働」『岩波講座 日本通史 21』岩波書店.

NHK 放送文化研究所編，2004,『現代社会とメディア・家族・世代』新曜社.

渡辺治，1988『現代日本の支配構造分析――基軸と周辺』花伝社.

岩田正美，1991『消費社会の家族と生活問題』培風館.

木本喜美子，1995『家族・ジェンダー・企業社会――ジェンダー・アプローチの模索』ミネルヴァ書房.

[謝辞]本研究は電気通信普及財団、サントリー文化財団、公益信託高橋信三記念放送文化振興基金、財団せせらぎ、稲盛財団、三菱財団、放送文化基金、小笠原敏晶記念財団、科学研究費補助金の支援による。